

平成19年9月の解説（週間天気予報）

【9月の天候状況】

上旬は北日本、東日本では台風や前線の影響で曇りや雨の日が多く、西日本では高気圧に覆われて晴れの日が多くなりましたが、大気の状態が不安定でしばしばにわか雨が降りました。中旬は北日本の日本海側、東日本・西日本の太平洋沿岸、沖縄・奄美の地方では台風や前線の影響を受けて曇りや雨の日が多く、そのほかの地方では晴れの日が多くなりました。下旬は北日本では低気圧や前線がしばしば通過し、曇りや雨の日が多く、東日本、西日本では高気圧に覆われて晴れの日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、東北地方と東日本日本海側、および西日本で平年より多く、北海道、沖縄・奄美地方では平年より少なくなりました。降水量は北日本、沖縄・奄美地方で平年より多く、東日本日本海側と西日本では平年より少なくなりました。気温は全国的に平年より高く、平年より3℃以上高くなった観測地点もありました。

【9月の検証結果】

「降水の有無」の適中率（3～7日目の平均）は全国平均では例年（注）より2ポイント高い66%でした。東海地方では例年より10ポイント低く、東北、中国、九州北部地方では例年より7から10ポイント高くなりました。最高気温（2～7日目の平均）の予報誤差は多くの地方で例年を下回り、全国平均は例年より0.1℃小さい2.3℃でした。最低気温（2～7日目の平均）の予報誤差は東北、関東甲信、九州北部、九州南部地方で0.3℃から0.7℃小さく、全国平均では例年より0.3℃小さい1.8℃でした。

（注）例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【9月の週間天気予報から】

9月30日は本州の広い範囲で雨となり、東京地方も終日雨が降りました。30日の天気を週間天気予報では5日前の25日には「くもり一時雨」、3日前の27日には「くもり時々晴れ」と予報しました（表）。

表 「9月30日の東京地方の天気」の予報と実況

「9月30日の東京地方の天気」の予報								30日の 実 況
予報発表日	23日	24日	25日	26日	27日	28日	29日	東京の天気
天気予報								

図1は25日に使用した予想資料です。中国大陸と太平洋で気圧が高く、日本付近は西日本を中心に気圧が低くなっています。また、予想降水領域が本州東部から日本海を通して朝鮮半島へと東西にのびています。これらのことから日本付近には東西にのびる活発な前線が停滞すると予想し、30日は東京地方の広い範囲で雨が降ると考えました。

一方、図2は27日に使用した予想資料です。大まかな気圧配置は図1と似ていますが、西日本を中心とした気圧の低い部分は無く、予想降水領域は日本付近で狭く南に下がっています。このため前線は日本の南海上に停滞するものの活動は弱いと予想し、30日は東京地方で雨が降るおそれは少なく、雲は多いものの晴れる時間帯もあると考えました。

実際は、停滞前線が日本の南岸付近に停滞し、その活動も活発になって関東の南海上に低気圧が発生したため（図3）、東京地方では終日の雨となりました。天気予報としては5日前に発表した予報の方が、それより新しい3日前に発表した予報よりも適切であったこととなります。

大きな規模の気圧配置は数日前から概ね予想できる場合も多いのですが、実際の天気を左右する前線の正確な位置や前線活動の程度などの詳細については誤差を伴います。一般的に誤差は予報対象日に近づくほど小さくなりますが、時としてこの例のように3日前より5日前の予想の方がより実際に近いというようなことも起こります。天気予報を発表する際には、予想資料を十分に精査して予報を行っていますが、予想内容が前日と変わった場合の判断には難しい場合もあります。

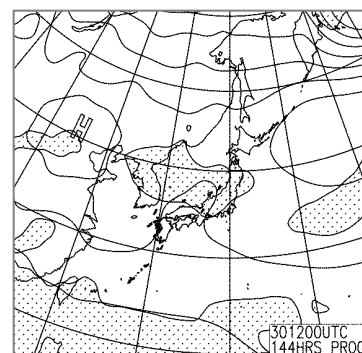


図1 25日の予報で使用した30日21時の予想資料：水玉模様の領域は前24時間に降水が予想される領域

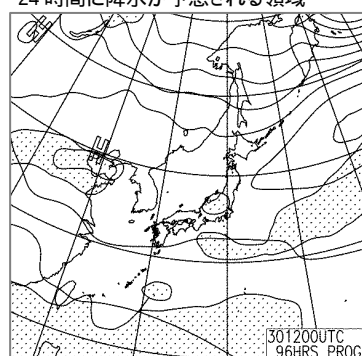


図2 27日の予報で使用した30日21時の予想資料：水玉模様の領域は前24時間に降水が予想される領域

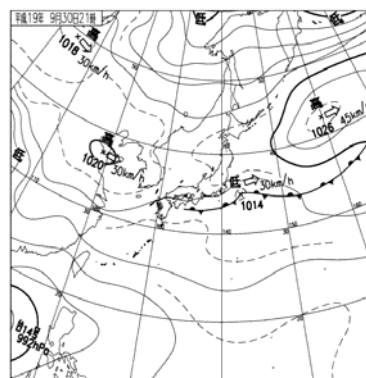


図3 9月30日21時の
実況地上天気図

【11月の週間天気予報の利用にあたって】

晩秋から冬にかけては日本の西に高気圧、東に低気圧が位置するいわゆる冬型（西高東低）の気圧配置になることが多くなります。冬型の気圧配置は低気圧が発達しながら日本付近を通過した後に現れやすく、冷たい北風が吹いて気温が急激に下がり、日本海側の地方では気温によって雪やみぞれ、雨などが降り、太平洋側の地方では晴れるところが多くなります。雪への備えや健康管理などのために天気の予報とともに気温の予報も活用して下さい。